猫になる

ペンギン隊長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫になる

【Nコード】

N1544R

【作者名】

ペンギン隊長

【あらすじ】

僕は猫だ。俺は猫だ。猫だ。此処は何処だ。知らない。わからな
い。どうでもいい。だって、僕は猫だ。猫だから猫で、猫なんだか
らどうでもいい。そう、うん、そうだ、多分そう。そういう事。

1、身体を洗う

「お姉ちゃんさ、就職どうなってるの？」

「…決まってない」

「決まってないって…ちゃんと試験受けに行ったりしてるの？」

「・・・」

…何で妹に尋問されなきゃいけないんだろ、オレ。

いや、オレが何も言っていないからいけないんだってのはわかるけど。何もしてないように見えるのがいけないってのはわかってるんだけど。

でもさ、だからって何で？お前はお前の事頑張ればいいじゃん。テスト三日後ならその為の勉強でも何でもやればいいじゃん。お節介焼き。

早く髪の毛洗って場所を開けてよ、ボクが髪の毛洗えないじゃん。お風呂、何か今日熱いから早めに出たいんだけどな。

君がボクの事お節介焼かなくていいよ。頼りない姉だってわかってるけど、だからって世話を焼こうとしなくていいよ。ボクの事なんか放っておいてよ。お前はお前の事を頑張るべきだろう？だって来年度からはお前大学に行つて家を出て下宿するんだろ。っていうか、下宿するってのは今聞いた所だけだ。

「ねえ、お姉ちゃんはなんで遅刻すると怒られるかわかる？」

「…何の話？」

どくんどくん、心臓が早く動いてる。何だか気持ち悪い。

「今どうなってるかわからないから怒るんだよ。今どうしてるかを言わなきゃダメなんだよ」

そんな事言われたって、言える事なんかないんだから仕方ないじゃないか。

白い泡が排水溝に溜まっている。気持ち悪い。だって、気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

唾を吐きだす。しょっぱい。涙の所為とかじゃない。きっとこれは汗の所為だ。汗をかいたからしょっぱくなってるんだ。もしかしたら鼻水の所為かも知れない。ああ、気持ち悪い。

心臓がどくどく言ってる。のぼせてきたのかな。気持ち悪い。今日は髪の毛洗わなきゃ。だって汚いもの。汚いんだから洗わなくちゃ。気持ち悪い。気持ち悪い。

『ねえ、何でこんな事言われてるのかちゃんとわかってる?』

わかってる。ボクが何も言わないから。何も言われないからって何も言わないから。わかってる。

でもねえ、言う事なんてないよ。言える事なんてないよ。わかってるんだ、言ったって意味がないんだもの。わかってるよ。

だって僕はダメなもの。わかってる、わかってる。でも、ダメなんだもん。わかってる。

『そうね。あなたはダメだわ。言われた事しかできない、お人形だもの』

・・・

『私たちと話すのもただのお人形遊びだってわかってるんでしょう？ねえ、わかってるんなら改善してみたらどうなの？』

お人形遊び？改善？何それ。わからない。だって、ボクはお人形は嫌いだもの。気味が悪いし、怖いもの。わからないよ。

それに、オレは人形じゃない。人形じゃない。人形じゃない。人のいいなりになつたりしない。人と同じになつたりしない。

だって、オレはオレで、オレだもん。お前の言う事はよくわからないよ。お前もオレのはずなのに。何でだ？わからない。

お前はオレだろう？オレはお前じゃないけど、お前はオレだろう？そっだらう？そのはずだろう？なのに、何でお前はオレにわからない事を言うんだ？何でだ？

『いつまで、私に頼るつもりなの？私に尻をたたかれないと何もできないの？それとも、私に慰めても期待してるの？私は、あなたを慰めたりなんかしないわ。だって、私はあなたを人形にしたい訳じゃないもの。私に頼りっきりの人形なんて、いらないの。ちゃんと自立しなさいよ、鬱陶しい』

何時になくとげとげしいな。オレがいつお前に慰めを期待した？何時頼った？オレは、自分からお前に何かを求めた覚えはない。

『そう、あなたは何も要求しない。自分からは動かない。誰かにしてもらうのを待ってるだけ。だから人形だって言ってるのよ』

オレは人形じゃない。人形じゃない。人形じゃない。じゃない。だ
って、オレは、人形じゃない。

ボクは、ボクは、ボクは、人形じゃない。人形じゃなくて、人形じ
ゃなくて、人形じゃなくて、ボクは、ボクは、ボクは、猫だ。

そう、ボクは猫だ。猫。猫なんだ。猫だから、人形じゃない。だっ
て、ボクは猫だから。

『……そう。で、いつまでそこでぼうつとしてるつもり？髪の毛
洗うんじゃないの？』

そう、髪の毛洗わなきゃ、そうだった。髪の毛、洗わなきゃいけな
いんだ。だって、汚いから。洗わなきゃいけないんだ。

心臓がどくどく言うてるけど、言うてるから、ゆっくり、動かなき
や。髪の毛洗わなきゃいけないから。まずはお風呂から出て、シャ
ワーを出さなきゃ。

あ、お風呂から出たら蓋をしなきゃ。だって、お湯が冷めちゃうも
の。まだ、妹たちが入ってないんだから、蓋をしなきゃ。蓋をして
おこなきゃダメだ。

髪の毛、洗って、お湯で流してから、シャンプーで、リンスで、顔
も洗って、だって、汚いもん。汚いものは洗わなきゃ。

『何で？』

だって、汚いものは洗って綺麗にしなきゃ。汚いもの。でしょう？
だって、洗わなきゃ汚いもの。

『汚いものは洗っても汚いままよ。だって、汚いものは汚いんだも
の。洗って綺麗になるのは綺麗なもの。綺麗なものについていた汚
いものがとれて綺麗になるのよ』

ボクは汚いものじゃない。汚れてるだけ、だって、そうでしょう？
ボクは別に汚いものじゃないもん。汚れてるものは洗わないと。洗
って、綺麗にしないと。そうでしょう？だって、汚いもん。
洗わなきゃ。洗わなきゃ。洗わなきゃ。汚れを落として、綺麗にし
なきゃ。汚い、汚い、汚い、汚い。

『あら、あなたも汚いものでしょう？だって、その汚い汚れはあな
た自身から出てきたものだもの。汚いものは汚いものから出てくる
ものでしょう？だから、あなたは汚いのよ。汚いものなのよ』

違うちがう違う。ボクは汚いものじゃない。汚いものなんかじゃな
い。だって、ちがう、ボクは汚いものじゃない。

オレは、綺麗なものじゃないかも、しれないけど、汚いものじゃな
い。だって、違うんだ、オレは汚いものなんかじゃない。

『いいえ。綺麗なものなんてないのよ。何もかも汚いものばかり。
汚いものが表面だけ繕って綺麗なフリをしてるだけ。そうでしょう
？あなたもわかってるでしょう？なにもかも、汚いものしかない
のよ』

汚くない、だって、洗えば綺麗になるもの。汚くなくなるもの。だ
から、汚くない、汚くないの。そう、ボクは汚くなんかない。汚い
わけじゃない。そうでしょ？ねえ、そうでしょ？

『ねえ、わかってるんでしょ？だって、私はあなただもの。あなた
は私だもの。そうでしょう？ねえ、お人形のご主人様。お人形遊び
をしてるお人形のご主人様。それとも、名前で呼んでほしいの？』

名前で呼ぶ？名前、名前？いやだよ、呼ばれたくない。呼ばないで、

君は呼ばないで。ボクを、呼ばないで。いやだもん。嫌なものはいや。ボクは君を名前で呼べないのに、君はボクを名前で呼ぶなんてずるいよ。ねえ、そうでしょう？不公平だよ。それに、ご主人様とか何の冗談？君は僕でしょう？主人も何もないでしょ？そうでしょう？ねえ、お前はボクでしょう？

ねえ、何で意地悪言うの？前はそんな事言わなかったのに。何も言わなかったのに。偶にちよっかいをかけてくるだけで何も言わなかったのに。ねえ、何で？何で？何でそんな事言うの？君はボクなんでしょう？何でボクにいじわるするの？

『そう、あなたはいつもお人形で、お人形でいるのが寂しいからって自分でお人形を作ってお人形遊びをしているのよね。いつもそう前からそう。ずっとそう。ねえ、でもねえ、お人形が作り主に逆らえるって事もわかってるでしょう？だって、あなたもそうだもの。ねえ、そうでしょう？』

わからないよ、だって、お人形はお人形でしょう？君はお人形じゃないでしょう？だって、好き勝手喋っているもの。お人形は勝手に喋ったりしないでしょ？ボクはお人形じゃないよ。そう、だってボクは猫だもの。ねえ、何を言っているの？

『じゃあ聞くけど、あなたは何故動かないの？何故あの時動かなかったの？何故あの時苛められていたの？』

え？何の話？ねえ、何の事を言っているの？ボクはボクでしょう？ねえ、何の話をしているの？ボクは、ボクは、猫で、猫で、猫で、猫で、そう、だから、ボクは猫で、君は、そう、君は中の人。そう、そうでしょう？ねえ、違うの？何が違うの？ねえ、君は僕で、ボクなんでしょう？そうでしょう？何の話をしているの？ねえ。

して？オレは、戦ったよ？ちゃんと、逃げずに戦ったよ？戦って、戦って、戦って、戦って、戦ったのに、誰も、誰も誰も、誰も、オレは戦ったのに、ダメだったよ、何で、オレは一人にならなきゃいけないの？ねえ、何で？ボク頑張ったよ？ねえ、頑張ったよね？ねえ、そうでしょう？ボク、頑張ったでしょう？

『知ってるわよ。ええ、私はあなただもの。知っているわ。でも、努力したからって全てが報われるわけじゃなくてよ？知っているでしょう？現実には小説みたいみんな上手くいくわけじゃないわ』

知ってるよ。知ってる。大団円なんて作りもので、瞬間で、ハッピーエンドは現実に生れっこない。だって、問題解決したって現実はそこで終わらないもの。ずっとずっとずっと続いていくもの。そこで終わりじゃないもの。だから、みんな上手くいって終りに何てならないもの。

『ねえ、いつまでお人形遊びをしているつもりなの？髪の毛を洗ったらお風呂をでなきゃ。次の人が入れないわよ』

わかってるよ、うん。わかってる。知ってる。知ってる。洗い終わったから、身体を拭いて服を着なきゃ。あと、髪の毛を乾かさなきゃ。でも、お風呂から出てから。そう、お風呂の部屋をでなきゃ。そう、でなきゃダメ。出て、タオルで体をふかなきゃ。パジャマを着なきゃ。そう、わかってる。

うん、わかってる。いつまでもこうしていると、他の人が迷惑。そう、わかってる。うん。

『あなたは猫になりたいのよね』

そう、猫。ボクは猫。猫。人間は嫌い。嫌いだもの。みんな嫌い。そう、だって、ボクを嫌いなものを好きになれる訳ないでしょ？だって、嫌われてるんだもの。ボクは、嫌いじゃなくても、嫌われてるんだもの。

『それは只の被害妄想でしょう？誰もあなたの事なんか気にしてなんかいやしないわ』

うん、そう。大多数の人は無関心。ボクの事なんか気にしない。気にしない。居てもいなくても同じ。そう、それだけ、僕なんか採るに足らない、ただのモブ。そう、知ってる。わかってる。ボクは特別じゃない、只の1。

でも、アイツらはみんなオレの事嫌ってる。嫌いって仲間外れにした。そう、だって、そうなんだろう？戦っても、戦っても、戦って何にもならなかった。オレは、一人ぼっち。一人は嫌い。寂しいのは嫌い。なあ、そうだろう？お前もそう思うだろう？だって、寂しいもの。嫌だ。寂しいのは嫌だ。そう、オレは、一人は嫌いだ。なあ、そうだろう？

『みんながみんな、そうとは限らないでしょうに』

だって、好きって言われた事なんかない。ボクが好きじゃないのに、好きって言われるわけはない。嫌いじゃないけど、好きじゃない。ボクは、自分なんか好きじゃない。弱虫で、臆病で、何もできないねえ、君だってボクの事なんかどうとも思っていないんだろう？そうだろう？だって、ボクはボクの事なんか好きじゃないんだもの。

『そもそもあなたに好き嫌いなんて、情熱なんて、強い気持ちなん

て有るの？一回で諦めるくせに、強く思う事なんて有るの？』

そんな事ない。ボクだって好きなものはある。好きなものがないなんて事は無い。

『じゃあ、何が好きなの？』

ボクは、ボクは。ボクは、ボクは、ボクは、ボクは、音楽が好き。音楽、絵を描く事、考える事、文を書く事、音楽が好き。そう、ボクは音楽が好き。歌うのが好き。歌が好き。そう、ボクは、ボクは、音楽が好き。

『猫なの？』

猫が音楽が好きで何かおかしいの？ねえ、何故そんな事言うの？ボクは猫だよ。猫。ボクは音楽が好きだよ。ねえ、何かおかしいの？ねえ、何かおかしいってどういうの？

君はボクなんでしょう？ねえ、何で？何で？何でそんな事言うの？ボクなんでしょう？なら、わかるでしょう？ボクは猫で、ボクは音楽が好きなんだよ。ねえ、そうでしょう。そうでしょう？

『あなたは飼い猫になりたいのよね。∴自分でえさを取るのも、他人に媚を売るのもできないみたいだし』

うん、そうかもしれない。多分そう。そうだと思う。多分そうだと思う。そうじゃないかな。あってるんじゃない。うん、そうだと思うよ。

ボクは猫だもの。鼠を捕ったりはできないけど。天気予報はできないけど。猫だもの。

『人間が猫になれる訳ないじゃない』

知ってるよ。知ってる。わかってる。人間は猫にならない。でも、ボクは猫になりたい。だって、ボクは猫だもん。そう、知ってる。無理でも、ボクは猫になりたい。猫がいい。人間はもうウンザリ。猫がいい。猫。ボクは猫。

『猫は、音楽を聞かないし、絵を描かないし、文も書かないわ』

『ねえ、そうでしょう？知っているでしょう？身近にちゃんと猫がいるもの。猫は音楽を聞かないわ。わかってるでしょう？』

でも、ボクは猫だよ。猫がいい。猫がいいんだ。だって、ボクは猫だもの。ねえ、そうでしょう？だって、皆ボクの事を変だっているもの。だから、猫がいい。人間は嫌。猫がいい。猫なの。ボクは猫ねえ、そうでしょう？

猫が音楽を聴いちゃいけないの？音楽がなきゃボクは生きていけないよ。だってそうでしょう？ボクには音楽が必要だよ。知っているでしょう？僕から音楽を取り上げたらダメだよ。まともで居られないよ。だって、そうでしょう？ねえ、知っているでしょう？

君は知っているでしょう？ボクには音楽が必要なんだ。だって、必要なんだもの。ねえ、知っているでしょう？

『……今日はもう休んだ方がいいわ。あなた、疲れているのよ』

そうかなあ。ボクは疲れているのかな。そうかな。君が言うんならきつとそうだね。疲れている気はしないけど、君がそういうならきつと僕は疲れているんだ。きつとそう。よくわからないけど。ボク

は疲れているんだ。うん、きっとそうなんだろうね。

眠るよ。ボクは眠る。君が休めというなら、ボクはそうする。だって、疲れている時は休んだ方がいいもの。そうでしょう？休まなきゃ。疲れているんなら休まなきゃ。そうだよな。

おやすみ。おやすみなさい。ボクは眠る。だって疲れているんだもの。

2、僕は猫

『いつまで惰眠をむさぼるつもり？そろそろ起きたらどう？』

…うん、起きる。何時迄も寝てるのはよくない。よくないもの。だから起きなきゃ。そうだよ、うん。

…あれ？何かおかしい。何がおかしい？おかしい。おかしい。おかしい。ねえ、何がおかしいんだろう。何かおかしい？おかしい、おかしい、おかしい、おかしい、おかしい。

『少し落ち着きなさいよ。ねえ、何がおかしいと思うのか言ってみなさい？』

ボクは今、何処にいるの？

『口に出していつてみなさい』

「にゃー（此処は何処？）」「

…

『…』

ボクは、猫？

『猫ね。まじごう事なき猫ね』

は高く飛べる。そうだろうか？
オレは少し下がって勢いをつけてジャンプした。

：ちゃんと乗れず、前足を引つ掛けてよじ登る事になった。情けない。まあ、ボクはあまり運動が得意ではないのだ。猫になったからと言って、初めから上手くやれるわけではないのかもしれない。窓から外を見る。空は青い。見上げれば太陽が昇っている。まだ午前中だとは思うのだが：そういうえば、今は何時なのだろうか。まあいいや。どうでもいい。ボクは猫なのだから、時間など関係の無い事だ。だってボクは猫なんだから。窓から見下ろすと、地面が随分下に見えた。どうやら、この家には大きな庭があるようだ。それも、西洋風の。まあ、この家自体が西洋風だから、西洋風の庭が付いていても何もおかしくは無い。寧ろ、当然の事だ。

「おやおや、お嬢様、そんな所に登ってはいけませんよ」
知らない人に抱きあげられた。男の人だ。多分、日本人じゃない。だって、髪の毛が薄い金色なもの。目も綺麗な青い色をしている。その青い目がモノクルの奥で、キラキラと細められる。

「お腹が空いたんですか？すぐに朝食を用意してあげますからね」
「にゃーん（それは助かるかもしれない）」

あまり、空腹だとは感じていなかったが、食事は必要だ。特に朝食は頭を働かせるためには必要不可欠だ。寝起きの頭はガス欠なのだ。エネルギーが必要なのだ。空腹でなくとも食べるべきなのだ。男の人の長い指がボクののを撫でる。ちりちりと鈴が鳴る。ごろごろとボクの喉が鳴る。気持ちがいいから、という生理現象の様なものだろう。目を閉じる。もうちょっと、耳の方も搔いてほしいな

あ。

陶器のお皿にお魚と思しきものがのっている。ボクの前に差し出された、という事はボクが食べていいんだろう、多分。

…いいんだよね？

「どうぞ、お嬢様」

男の人がにつこり笑う。ボクは遠慮なく食べる事にした。まずは、注意深く匂いを嗅ぐ。どうやら、刺激物の匂いは無い。魚そのままの匂いがする。…いや、他にも何か入っている…かな？まあいいや。ゆっくりと口をつける。塩味が少なく、素材そのまま、という感じの味だ。そういえば、猫には調味料をあまり与えてはいけないと聞いた覚えがある。それでだろう。まあ、元々食事にそれ程執着は無い。ちゃんと栄養が^{エネルギー}取れば十分だ。不味いわけじゃないし。

「バター、ネロがない!!」

「旦那様、落ち着いてください。お嬢様ならここにいらっしやいます。お食事中です」

騒がしい音を立てて、男が走ってきた。何やら騒いで、さっきの男の人に怒られている。まあ、放っておこう。ご飯が先だ。食べてから考えよう。食事は大切だ。うん。

「こんな所にいたのか…目が覚めたら居なかったから心配したんだぞ」

「しゃーっ（食事の邪魔をするな）」

「?!」

「旦那様、お嬢様はお食事中だと申しあげたでしょう」

そう、食事は邪魔してはいけないものなのだ。取られるとかは別に思っていないが、食事中に触られるのはちよつと不快だ。邪魔する奴は怒られればいい。…もう少しで終わるんだから待つてくれればいいのに。

目の前の皿に入っていた料理を平らげると、顔を洗う。ひげとか、口の周りとかに食事の跡を残すのは行儀が悪い。ついでに毛繕いもする。どうやらボクの毛色は黒であるようだ。そういえば、ネロとか何とか言っていたな。何処かの言葉でネロは黒と言う意味だった…ような気がする。あれ、違ったっけ?…まあいいや。多分、ボクがネロと呼ばれているとしたら、この毛色からだろう。艶やかな漆黒の短毛。尻尾は長い。まあ、所謂テンプレート的な黒猫で間違いないだろう。瞳の色が何なのかは今のところわからないが。

「満足されましたか?お嬢様」

「にゃー（まあ、大体）」

ご飯をくれた方の男の人に背を擦りつける。猫はご飯をくれる人に懐くものである。むふう。

そうしながら、二人を観察する。ご飯をくれた人（確かバトラーと呼ばれていた）は金髪碧眼だが、もう一人（確か旦那様と呼ばれていた）は綺麗な空色の髪の毛をしている。目の色は緑と紫だ。何だか、とても目立ちそうな色合いである。というか、地球にはありえ

ない色合いだ。青系の色素は人間の髪の毛にはないのだと聞いたような覚えがある。だが、どうやら染めているという様子ではない。自然な髪色があれなのだろう。

ふむ。どうやらここは、ボクの常識など通用しない世界なのだろう。さらに二人を観察する。バトラーは黒いスーツバトラーというか…燕尾服？を着ている。その名（呼び名？）の通り、執事なのかもしれない。よく見ると、左手には白い手袋をしているが、右手は素肌のままだ。そういえば、撫でてくれたのは右手だった気がする。ボクを撫でる為に手袋を外したのだろうか？対して、旦那様の方は、恐らく寝巻であろうシルクのガウン？だ。着崩れている。

…っていうか、今更だけど、ボクの気のせいかな？耳が尖ってる気がする。後角が生えてる気がする。羊みたいな巻き角。飾り？それとも本当に生えてるの？ボクの気の所為？

「ネロ、もう触ってもいいか？」

「にゃーん（勝手にすれば）」

恐る恐る、というように旦那様がボクの前に手を伸ばす。仕方がないので、ボクの方から頭を掻かれに行く事にした。ていうか、動きが不審すぎるんだよ、あんた。

旦那様の指は細くて長くて白い。後、爪もちょっと長い。ちゃんと切るべきだと思っけど。

「…ところで旦那様、お召し変えがまだの様ですが」

「ネロが見当たらなくて心配だったんだから仕方ないだろう！」

「ヴェルフォール家の当主たるもの、どんな時も泰然自若を心がけずしてどうするのです。屋敷の中と言えど、ナイトガウンで歩きまわるなどもつてのほかです」

「へいへい」

「旦那様」

どうやら、旦那様は”ヴェルフォールケノトウシユ”であるらしい。偉いんだろうか。まあ、旦那様と呼ばれてる時点でそれなりに偉いんだろうが。まあ、猫であるボクにはあまり関係ないか。しかし、屋敷という事は、この家は大分広い、という事で間違っていないかつたらしい。まあ、ボクの体が小さいのもまた確かだが。

旦那様がボクを抱き上げる。抱き方が下手なので左の後ろ脚が宙に浮いている。ちょっと不快だ。そのまま蹴りを入れてやる。

まあ、何処にも当たらないんだが。

旦那様の着替えの間、ボクはまた毛繕いをする事にした。野郎の着替えに興味なんかない。美女の着替えとかならちよつと見たいかもしれないが。でっかいおっぱいはロマンだ。まあ、自分がほしいとは思わないが。

とはいえ、さつき一度毛繕いした所だったので、すぐに毛繕いは終わってしまった。仕方がないので少し部屋の中を見て回る事にした。未だに着替えをしている旦那様は意図的に視界から外す。野郎の裸を見て何が楽しいというんだ。

そしてオレは大きな鏡を見つけた。所謂、姿見と言う奴だろう。それに自分の姿を映してみる。黒い、猫だ。しなやかな長い尻尾、とがった耳。目は、青と緑。いや、鏡に映っているんだから緑と青、^{△テロクロミア}と言っべきか？まあ、とにかく左右で違う色の瞳だ。異色症とか、オッドアイともいう。そういえば旦那様もオッドアイだった。

ボクが手を上げると、鏡の中の黒猫も手を上げる。引っ掻く様にし

てやれば、鏡の中の猫も同じように動いた。

「どうした？ネロ。鏡が珍しいのか？」

旦那様がボクを抱き上げる。矢張り下手な抱き方だ。というか、抱き上げると言うよりも、持ち上げる、という方があっているかもしれない。後ろ足が何処にもつかなくて揺れている。不愉快だ。思いきり暴れてやったら旦那様は手を離れた。そのまま一回転して着地する。旦那様は意外と背が高い。

「…お前はオレが嫌いか？」

別に嫌いじゃないがお前の抱き方は下手すぎて不快だ。

オレと一緒に連れて行くこうとしてバトラーに怒られたりしつつ、旦那様は何処かに出かけていった。まあ、出勤的な何かだろう、多分どうやら成人の様だし、学校とかではあるまい。大学とかに行くには格好が、何とか云うか…礼服、という感じだ。かつちりしていて、尚且つ派手、というか。まあ、旦那様が何処に行くこうと、オレも一緒に行くわけじゃないから関係ない。玄関の扉は閉められてしまったし。

ボクはとりあえず、屋敷の中を探検する事にしようかな。見ると、幾つかの部屋は細く扉が開けてある。どうやら、開けてある扉には入っていい様だ。逆に、入ってほしくない部屋は扉をきちんと閉めてあるのだろう。面白いものがあるかは分からないが、まあ、色々見て回ってみようじゃないか。

3、歩きまわる

どうやら、朝歩きまわった時に誰にも会わなかったのは、ある意味運が悪かったただけであつたらしい。

屋敷の中を気ままに歩いていると、ちらほらメイドさんやらボーイ(?)さんやらを見かけた。まあ、所謂使用人という職業の人で、皆揃いの白黒のお仕着せを着ていた。肌の露出を抑えた上品なデザイン洋服である。間違つても、某コスプレ喫茶のような服装ではない。機能性もあるのだろう、皆プロフェッショナルの様な美しい動きをしていた。…いや、多分プロフェッショナルの様なものなんだろうけども。

服装は皆一様にお仕着せの白黒だったが、各々の持つ色彩は彩に溢れていた。流石に旦那さまと同じ色、オッドアイをしたものはいなかったが、赤青黄色緑紫白銀様々な色の髪や目をした者がいた。…そして、認めよう。どうやら、此処にいるヒトたちは人間ではないようだ。獣人とか、あからさまに人外の姿をしている者は見かけなかったが、翼をはやした者や尾を生やした者はいた。後、何か摩訶不思議現象を起こしている者もいた。あれは魔法だろうか。ボクも使えたらいいのに。

『使えたら、って何に使うのよ』

え?うーん…まあ、使えたら面白いのにな、ってだけだし、思い付かないなあ。レポートできたらいいのに、とかは度々思ったけど、

屋敷の中を動き回る位なら態々テレポートするのも何ていうか、オーバーアクションな気がするし。

『相変わらず、その場のノリで発言するのね』

発言はしてないけどね。思ってるだけだから。頭で考えるのはボク
の自由でしょ。

使用人の人達はオレに対する対応を迷っている様な気がした。何と
言うか：遠巻きにされてる感がある。こちらから近づけば逃げられ
たりはしないのだけど、あちらから近づいてくる事は無いし、離れ
て追いかけられたりはしない。まあ、仕事中だったのもあるんだろ
うけど。まあ、危害を加えられないんだから別にいいや。

ボクがどういった位置づけなのかは不明だが、近づけばネロ様、或
いはお嬢様と呼ばれた。多分、ボクは旦那様のペットという事にな
っているんじゃないかと思う。どうしてそうなっているのかは知
らないが。

：気になる事は気になるが、調べる方法が思いたらない。ボクは
猫だから旦那様達と意思の疎通があまり詳しく測れないし。バトラ
ーは多少ボクの意味をくみ取ってくれるけど。どうせなら旦那様の
僕への扱いも矯正してやってほしい。

「あら」

背後から声がして、誰かが走ってくる。オレは何となく身の危険を
感じ、緊急回避を図る。即ち、前方にあった家具の上へ飛び上がり、

さらに高く上る。大きな柱時計に乗ろうと飛び上がった所で足を掴まれ、登りそこなった。

「あなたがルードお兄様のネロ？」

見知らぬ女性：少女？だ。だが、不思議と既視感がある。大きな紫色の瞳がオレを見つめている。多分美少女と言って差支えないだろう。跳びあがろうとした所を掴んで止めるのはいただけないが、抱き方自体は悪くない。：いや、旦那様が下手すぎるだけかな。：ああ、そうか、旦那様に似てるんだ。髪の色も旦那さまと同じ空色だし、顔立ちも何となく似てる。：ような気がする。多分。：まだ全然顔覚えられてないけど。まあ、この子はオツドアイじゃないけど。

「本当に左右で目の色が違うのね。お兄様と一緒にだわ」

「にゃー（お兄様？）」

「私はフランシスカ。ファニーでいいわよ」

少女はそう言っただけで花が咲くような笑みを浮かべた。お兄様というのは多分旦那様の事なんだろう。という事は、この子。ファニー、だっけ？は旦那さまの妹なのか。

ファニーはニコニコと僕の頭を撫でる。まあ、気持ちいいのだけど、ボクはそれで誤魔化されるような性格はしてないんだから。引きずり落とされた恨みはのこってるんだから。

「フランシス様、此処にいらっしやったのですか。：」

「バトラー。もう来たの。：それに、フランシスじゃなくてフランシスカ」

心なしか、バトラーは疲れているようだ。ファニーは頬を膨らませ、口を尖らせる。美少女は何をやっても可愛いから得だなあ。

バトラーはファニーの腕の中にいるオレを見て、キリツと顔を真剣なものに変えた。

「フランシス様、お嬢様は病み上がりですので、あまり構いすぎないでさしあげてください」

まあ、そもそも猫はあまり構われ過ぎるのは好まない生き物だけだね。つかず離れず、位が丁度いいんだ。時々構ってくれれば十分。

「折角お兄様が居ない時に来たのに」

どういう事なの。

…うーん……まあ、いいや。多分オレが考えてもわからないんだろっし。

「…学校を抜け出して、ですか？」

「そ、それは…わ、私は優秀だから、問題ないのよ。一日ぐらい授業に出なくても何の問題もないわ」

「そういう問題ではないでしょう。迎えの方がすぐにいらっしやるそうですから、大人しく戻ってくださいね」

「えー…」

どうやら、ファニーは学生であるらしい。…迎えがくる、って、どういう事なんだろう。所謂VIP待遇ってやつなのかな？ていうかサボってここに居るんだよね、つまりは。優秀だから大丈夫だって本人は言ってるけど、優秀だからってサボっていいわけじゃないと思うんだけどなあ。ていうか、皆勤を狙ったりはしないのか。…まあ、よく病欠してたボクの言える事じゃないか。

「…ねえ、バトラー、じゃあ、ネロも連れて行っていい？」

「ダメです。旦那様が泣きます」
「ケチー」

泣くのか。

結局、ファニーの迎えとやらが来るまでの間、ファニーはボクを構い倒した。疲れた。

ファニーを迎えに来たのは、暗緑色のローブを着た男性だった。ローブと同系色の帽子を被っていて、背が高かった。

ファニーは最後まで僕を連れていくと言っけなかつたが、男の人に寮はペット禁制だと言われて渋々諦めた。そんな所まで旦那様に似なくて良いと思う。…というか、ファニーって寮に入ってるのか。

「もう、相変わらずアンドラス教授は堅物よね」

「ヴェルフォールが破天荒すぎるだけだ。戻るぞ」

「またね、ネロ。今度はちゃんと許可を出させてからくるから」

ファニーはそういつて僕の頭にキスを落とす。”アンドラスキョウジユ”はため息をついているようだ。ファニーってもしかしたら問題児なのかもしれない。御苦労さまとしか言えない。…いや、ボク《ねこ》に会うためだけに学校を抜け出してくるんだから問題児でも何ら不思議はないか。で、なまじ成績あたまはいいから性質が悪い、と。

「…外出許可をとるとらない、ではなく休暇まで待つてください」

「あら、私がいつ外出許可の話をしたのかしら」

じゃあ、何の許可だ。

……まさか、ね……。

「ヴェルフォール、寮でペットを飼う許可はどうやっても出ないぞ」

「あら、そんな事やってみなきゃわからないわ」

「学校の許可が出ても旦那様の許可は出ないと思いますが」

オレもやだよ、学校なんて人多そうな所に行くの。

フアニーと男の人がいなくなって、ボクはバトラーと二人きりになった。バトラーの足を引つ掻く様にしてやると、バトラーはそれに気づいてボクに笑いかけた。

「どうなされました？お嬢様。もしや、空腹ですか？」

「にゃーおう（ううん。それは別に平気）」

「違う…では、…何でしょうか」

何も言わずに頭を擦りつける。そうしたらバトラーは僕の頭を撫でてくれた。

多分、バトラーは猫好きなんじゃないかなあ、と思う。猫の扱いに手慣れてるし。根拠はあんまないけど。

4、夜は嫌い

お昼も過ぎて、日が傾きかけた頃、旦那様が返ってきた。テンションが高く、鬱陶しい。何処に行っていたのだから知らないが、何か疲れたらしい。…疲れたって言うてるわりに妙にテンション高いけど。

「ネローVV」

「なーお（ウザい）」

旦那様が僕を抱きしめてすりすり頬を擦りつける。ウザい。まあ、邪険にするのすら面倒くさいからなすがままになってるけど。耳にでも噛み付いてやろうかな。

後、何かバトラーが苦笑するしかないっぽい感じなんだけど。そういえば、服に毛がつくのか気にならないのかな。ボクは気にしてやらないけど。面倒くさいし。どうしようもないし。

そういえば、旦那様は結局何処に行ってたんだろ。…まあ、どうでもいいか。ボクには関係ないし。

晩御飯の後、ボクは寢床として用意されていた籠の中に丸まっていた。つまり、朝眠っていた場所だ。其処は旦那様の部屋の一角でもあって、僕の籠の隣にはふわふわしたソファもあった。そちらも中々居心地がよさそうだと思わないではないが、矢張りその為に用意されていたのだし、というわけでボクは籠の中にいた。やわらかい布が詰まっついて寝心地は結構いい。眠いので、このまま眠ってしまってもいいだろう。

『もう眠くなつたの』

眠いのは、眠いのだ。猫だからかもしれない。猫は眠るものだ。だから僕は間違つてない。だから眠ろうと思う。

『…そう、お休みなさい』

おやすみなさい。また、あし、た……。

唐突に僕は目を覚ました。辺りは真っ暗だから、まだ夜中なのかもしれない。大きく欠伸をした後何故目が覚めたのかを考える。不思議と眠気はない。…夜中に目が覚めた事なんてなかったのに。一度眠れば朝起きる（起こされる）までぐっすりだったのに。寧ろ眠り

につくまでに時間がかかる方だったのに。

猫の目は暗闇を見通すから、僕の目には部屋の様子がよくわかる。ベットに人が眠っている様子は無い。旦那様はまだ起きているのだろうか？

籠から下りて絨毯の上で思いつきりのびをする。旦那様を探してみよう。起きているのなら、其処には明かりがあるかもしれない。何かをしているなら、それなりの音もするだろう。猫の耳も目も優秀な筈だから、きっとすぐに見つけられるだろう。多分。

暗い屋敷の中を歩き回る。不気味なほど静まり返った屋敷の中は、昼間と同じである筈なのに、何故か恐ろしく感じた。ボクはホラーは嫌いだ。正確に言うのなら、気持ちの悪いものと吃驚するものが嫌いだ。お化け屋敷なんて冗談じゃない。

……

何も聞こえないのは、怖い。

「……じゃー」

口に出して、僕の耳が聞こえなくなってるわけじゃないとわかって少し安心する。

昼間はそれなりに音がしていたのに、音のない屋敷の中はとても恐ろしい。遠くで、鳥の音がする。フクロウだろうか。フクロウとかの猛禽類は結構好きだ。だって、カッコいいから。でも、何故だか今は恐ろしいと感じる。状況に酔って感覚が敏感になっているのだろうか。

歩みを止めて、近くの窓を見上げる。暗い空だ。月は見えない。位置の関係だろうか。そういえば、今日の月齢はどれくらいなんだろう。…どうでもいいと言えどもいいけれど。

暫く歩きまわって、僕の耳は小さな音を捉えた。紙を捲る音、だろうか。その音がしたのが何処か、よくわからなかった。僕は立ち止まって耳をすませる。

………

ペンで何か紙に書き物をする音も聞こえる気がする。旦那様だろうか。バトラーという可能性もなくは無い気がする。前方にある部屋の一つ、その扉の隙間から、細く薄く、光が伸びているのが見える。

僕は静かにその扉に駆け寄る。ちりん、と鈴が鳴って、そう言えば僕の首には鈴がついていたのだと思いだした。どうも、鈴自体は後ろの方に寄ってしまったような感触があるが。

扉に手をかけてひっかくようにして隙間を広げる。そうして、丁度ボクが通れる程度まで隙間を広げると、ボクはその隙間から部屋の中に忍び込んだ。

「…ああ、ネロか」

旦那様が手元から顔を上げて、部屋に入り込んだボクを見る。何故だか眼鏡をかけていて、右手に持っていたペンをペン立てに戻した後、小さく伸びをした。ボクは小走りで旦那様に駆け寄ってみる。

「にゃー（夜更かし？）」

「ん？どうした？腹でも減ったのか？」

別に腹は減ってない。

旦那様はくすり、と笑って僕に手招きをした。ボクは少しためらった後手招きに応じて旦那様の膝の上によじ登る。机の上にはインク壺が見えたので、絶対に登らない事にする。悪戯をして怒られるのは御免だ。

「…ネロはあつたかいな」

「なーお（猫だからな）」

基本的に体が小さい生き物ほど体温が高いものだと思う。人間でも大人より子供の方が平熱が高いし。

旦那様が優しく僕の背を撫でる。ボクは旦那様の膝の上で丸くなる。何だか少し眠い。旦那様は抱き方は下手だが撫でるのは上手なんだ、多分。

旦那様の膝の上でうつらうつらしていると、ふっとランプの光が消えた。ボクが少しびっくりして耳を立てると、旦那様は小さくため息をついた。

「…何も、こんな時に来なくてもいいじゃないか」

折角ネロがデレてくれたのに、と呟く旦那様に猫パンチを喰らわせてやろうと思つたが（デレって何だ）、ついで感じた何か異様な気配に、僕は身を固くした。

何か、居る。

それが何だか、とても恐ろしい事のように感じられた。

きつと、見上げれば僕はその正体を見る事が出来るだろう。猫の目は、この暗闇でも目の前のものを正しく認識できる。でも、そうする気にはなれなかった。其処にいるものを直視するのが恐ろしかった。

「…chatte le maitre …duc vo
lfe

「あんまりネロを怖がらせないでやってくれるか？…オレがバトラ
ーに怒られる」

「bien

低い声が、僕の知らない言葉で話す。何かに見下ろされているのがわかる。何でだかわからないけれど、怖い。旦那様の膝の上にいるんだから、きつと攻撃を受けたりはしないだろうと、何となく思うけれども、でも、怖いものは怖い。

「…威圧感を出すな、と言っているんだ。わからなかったのか？モート」

「…non moi poser il digните」

「じゃあ何故ネロがこんなに怖がっているんだ」

「…vie di hivers instint？」

「本能、なあ…。まあ、生き物にとつちゃあ、お前を恐れるのは当然の事なんだろうが…」

旦那様の手が優しく僕の背を撫でる。ボクは、いつの間にか瞑ってしまっていた目を恐る恐る開いた。初めに映ったのは、苦笑を浮かべる旦那様。そして、その隣でボクを見下ろしていたのは、

「…terrible moi chatte？」

暗い位、深淵の様な、何か。それは、人の姿はしていなかった。人という姿の枠に収まる様なものではなかった。でも、なんだかそれは、悲しい目をしている様な気がした。だから、ボクは首を傾げた。闇の中で、暗い、暗い色をしているという事しかわからない瞳を見つめて、ボクはすうっと、恐怖が引いていくのがわかった。それが何故かはわからない。でも、ボクはそれを恐れる必要などないのだとわかった。

「にゃー（何でかわからないけど、怖くない）」

ボクがそう言っただんな様の膝の上に座ってそれを見上げると、それは驚いたような顔をした（気がする）。旦那様が小さく笑うのが聞こえた。それに気づいてボクが首を傾げると、旦那様は優しく僕の頭を撫でた。

「どうだ、オレのネ口は可愛いだろう」

「...niais...tres niais, mais va
rier di mauvais」

「お前なあ...」

旦那様が不機嫌そうな声を出すと、それは目を細め、少し笑った（様な気がする）。それを見てか、旦那様が凍りついた様に動きを止める。どうやら、予想外の反応だったらしい。

「...un peu de...tres un peu de,
peu et le vouloir cet chatte」

「?!ネ口はやらんぞ?!」

「...lui blague」

「...お前の冗談は冗談に聞こえん...」

疲れた様に溜息をつく旦那様を見て、ボクは首を傾げた。それが何を言ったのかは知らないが、どうやら”悪い冗談”でも言ったらしい。旦那様の反応からして、ボクがほしい、とかそういう事だろうか。んな事言われても困るんだが。主にどう反応していいかわからない、という点で。

それが僕に手を伸ばす。敵意は感じなかったのでじーっと見ていると、頭を撫でられた。冷たい手だ。手が冷たい人はやさしい人だっ
て聞いた様な気がするから、それもやさしい人なのだろうか。...人
ではないけれど。明らかに人ではないけれど。

「...dans di le conte vi travail
l duc volfe」

「...ああ、そうだな。お前が世間話などしに来るわけがない」

旦那様の手が僕の耳を覆うように僕の頭の上に翳される。

「ネ口、お前は聞かない方がいいだろう。眠っているといい」

旦那様が小さな声で何か呟いたのを理解する前に、僕の意識はすっと落ちていった。

次に目を覚ました時、僕は旦那様の腕の中にいた。もっと正確に言うのなら、旦那様と一緒に旦那様のベットのベットの中にいた。所謂、同衾ドウキンという奴だろうか。まあ、猫と人で同衾ドウキンと言うのも妙な話だが。日が昇り始めているのか、部屋の中にうすく光が差し込んでいて、僕は小さく欠伸をした。目は覚めはしたが、まだ少し眠い。起こされるまで大人しく眠っていよう。僕はそう決めてまた目を閉じた。

5、忘れたの。

大体一週間がたった。

あの日、旦那様はバトラーに僕を寝台に連れ込むんじゃないと怒られた。アウトらしい。

だが、それから旦那様は度々僕をベットの間に連れ込み、朝になるとバトラーに見つかって怒られる。あの人には学習能力がないのだろうか。それとも、バトラーに怒られるのが好き、とか？…。まあ、いいや。

この屋敷の人達は、皆僕に優しい。僕が猫だからか、旦那様のペットだからかはわからない。まあ、どちらでもそう変わらないう。僕という存在にも慣れたのか、手が空いている時は遊んでくれる人もいる。過剰に構われる事はないので、丁度いい。旦那様は時々ウザいけど。

屋敷の外に出る事はできないようになってるが、別に不満はない。全く興味がないとは言わないが、外に出る必要性を感じないのだ。元々の引き籠もり気質が幸いした、のだろうか。軟禁状態みたいなものだが、室内飼いの猫なんてそんなもんである。ちなみに、猫は外に出すよりも家の中だけで飼う方がストレスも感じなくて長生きするらしい。テリトリーが平穏ならそれでいいというか。

旦那様は毎日出かける訳ではないらしい。普段は執務室で書類を処理している、という感じっぽい。僕から見た印象なので違うのかもしれない。時々、気取っているけど動きやすい格好で何処かに出かけて行ったりする事もある。

あの日着ていた礼服？はどうやら、特別な時に着るもの様だ。まあ、あんなの日常的に着るのなんてかたっ苦しい事この上ないけど。

僕は毎日、うたたねをしたり、屋敷を歩き回ったりして過ごしている。時々構われる以外は気楽だし、平穏だ。悪くない。でも、時々思うのだ。

何か足りない、さびしい、と。

『贅沢者ね』

人は、満たされていても、その内それになれてさらに上を目指すものだというよ。

『あら、あなたは猫でしょう？』

うん。ボクは猫だ。でも、寂しいんだ。何か足りないと思っただ。

俺は、何かを忘れているのかな。何が足りないんだろう。

お前は知ってるのか？オレが何を必要としているのか。何を忘れているのか。

「ネーロ」

顔を上げて声のした方を見ると、旦那様が優しく微笑んでいた。：
何を考えているんだろう。少し、嫌な予感。

「ネロだって、偶には外に出たいよな？」

「なおうん（別に）」

変なフラグが立つ気しかない。しかも、下手に転べば、今の平穩が無くなる様なフラグだ。それは勘弁してほしいものである。

「だよな、そうだよな。ネロだつてずっと屋敷の中とか飽き飽きだよな」

おい、勝手に同意した事にするんじゃない。ボクは同意した覚えはないぞ。

旦那様は楽しそうに僕を抱き上げて（相変わらず抱っこするのは下手だ）、何時からか其処に立っていたバトラーに言う。

「っていう訳で、オレはネロとデートしてくる」

「ダメです」

バトラーは即答で斬り捨てる。容赦がない。旦那様はぷー、と口を

尖らせた。男がやっても可愛くない。ていつか、やめる。バトラーは顔色一つ変えない。

「お嬢様は猫です。犬とは違うのですよ？」

「知ってるって。超ツンデレだよな」

ツンデレとかいうな。そして家猫を連れ出そうとするんじゃない。旦那様が頬をすりよせるので猫パンチをお見舞いする。爪で引つ掻いたりしないのはオレの優しさだ。まあ、本気で嫌になったら容赦なくやる予定だが。

「他の奴がいると恥ずかしがるんだよな、ネロは。そういうところも可愛いけど」

ちげえ。

結局、旦那様が息抜きしないとお仕事できないとかごねてちょっとした散歩に行く事になった。傍迷惑な旦那様である。お前の血は何色だっ（余談だが、本気で赤以外の色をした血が流れていそうな人が数人いる。恐ろしい事である。流石人外）。

「…オレはネロと二人っきりのデートがしたかったんだがなあ」

「そんな事、させるとお思いですか」

「…思わねえ」

そんなやり取りをする旦那様とバトラーを、簡素な鎧を着て、腰に剣を佩いた男が二人、苦笑の様な表情を浮かべてみている。旦那様の護衛の様なものだろう。ちなみに、バトラーは付いてくる訳ではないらしい。

護衛の二人は、どちらも二等辺三角形な耳が頭頂部に生えていた。虎と豹、だろうか。尻尾も見える。所謂、獣人…まあ、獣要素は少ないんだけど。

僕は植物で編まれた小さな籠の中。小さい、と言っても十分僕が体を伸ばせる程度の大きさがあって、柔らかい布が敷かれている。その籠は旦那様の腕の中にある。取っ手もあって、それは肩にかけられる程度の長さがある。

「オセー、バラム、旦那様をよろしくお願いします」

「おい、バトラー、どういうことだ」

旦那様が抗議してもバトラーはスルーする。まあ、要するに旦那様が変わらない様に見張られて事なんだろう、多分。ダメダメだな、旦那様。

旦那様の歩みに合わせて少し揺れる籠の中から外を眺める。

何と言うか、自然が溢れた場所だ。道も舗装されていない、むき出しの土の様だ。まあ、それはちょっと道を外れて横道に入った感じだからだろうが。大きな道は舗装（と言っても、アスファルトとかじゃなくて、レンガの様なものだった）が）されていた。

「やっぱ、自然の中は癒されるよなー、ネロ」

「なーお（まあ、否定はしない）」

僕は田舎生まれの田舎育ちだ。コンクリートジャングルよりは自然の多い場所の方が馴染みがある。まあ、そうは言っても、こんな森！って感じの森はそうそういった事がなかったが。…あまり、外に出る方でもなかったし。

…否、でも、小さい時は結構外で遊び回っていた様な…。んー…まあ、どうでもいいや。

聞こえるのは旦那様の足音と、後ろから付いてくるオセーとバラーム（どつちがどつちかは不明）のたてる金属が触れ合う様ながしやがしやという足音。それに、鳥の声。鳥の声はしても、それが何処にいるのかはよくわからないし、姿が見えない。何だか眠気がして、僕は小さく欠伸をした。

「どうした？ネロ。眠いのか？」

「なー…（そうかも）」

「そうか…。ふむ」

旦那様は一度立ち止まって少し何かを考えた後、優しくオレに微笑みかける。

「着いたら起こすから、眠っているといい。…お前を連れて行きたい場所があるんだ」

そう言って優しく撫でるから、ボクは静かに目を閉じることにした。

「ネロ」

優しくゆすぶられてボクは目を覚ます。小さく欠伸をした後、顔を洗う。何か、色々な甘い匂いが漂っているのを感じる。とはいえ、お菓子の匂いとかではない。この匂いは、花の香り、だろうか。

「ネロ、見えるか？この花畑が」

旦那様に促されてボクは辺りを見回す。諸所に咲き乱れる様々な種類の花達。やはり、花の匂いだったらしい。旦那様は此処に連れてきたかった、という事だろうか。

「綺麗だろうか？これをお前に見せたかったんだ」

「なーおう（…まあ、綺麗だとは思うよ）」

でも、少し…匂いが煩い、かな。色々混ざりすぎてるといっつか。悪かないけど、微妙。

「ネロは花にはあまり興味がないのか？」

そんな取り立てて興味はないかな。嫌いじゃないけども。

旦那様はボクを抱き上げて花畑の中に寝転がった。視界が大きく動いて、その中で一瞬少し呆れた様な顔をしたオセーだかバラムだかが見えた。…まあ、外で寝っ転がるのは大人としては中々…うん。だが、旦那様は暫くそうしているつもりらしいので、ボクはそのまま旦那様の胸の上で丸くなった。

…別に、悪くは、ないと思うよ。

6、寂しくない

あれから、旦那様はボクを連れて散歩したがるようになった。傍迷惑な話である。猫を散歩させるものではない。

猫は、意外と縄張り意識の強い生き物だ。そして、変化を厭う生き物でもある。外出するというのは、とてもストレスのかかる事なのだ。

だから、外飼いの猫は室内飼いの猫よりも長生きできない。それは、単純に交通事故などの外的要因だけが原因というわけではないのだ。とはいえ、旦那様がボクを連れだすのは例の花畑だけである。いつも決まって、オセーとバラム（オセーが豹で、バラムが虎の方だったみたいだ）を伴っている。

まあ、街とか、人の多い所に連れて行こうとしないあたりは…警備上の問題、か？まあ、ボクとしてはその方がいいから文句はないが。そもそも、屋敷自体が少し人里離れた場所にあるような印象がある。使用人の人達とかは屋敷の近くにあるえつと…宿舎？的なものに住んでいるらしい。旦那様の散歩のときでも、他の家が近くにある様子はなかった。

「ネロ、どうした？」

「なーん（別にどうもしないけど）」

ボクが籠の外を眺めている事に気付いた旦那様がボクに話しかける。特に深い意味なんてない。有り体に言うならば、単純に興味かわいたからだ。外の世界というものに。ボクが猫である以上、そんなものには興味を持たない方がいいのは、わかっているのだが。

『そうかしら?』

だって、猫は、ボクは、オレは、外に出ないで家の中でずっといる方が幸せだから。可愛がつている人がいるのなら、その人の腕の中だけで過ごす方が心穏やかでいられるから。それが、幸せだから。そうでしょう? ボクを傷つけるかもしれない、外になんて、行かない方がいいんだ。

『…あなたがそう思うのなら、そうなのかもね』

ボクは、そう思うよ。

「ネロ、この花畑はね、エルシオンでもっとも大切な場所なんだよ」「なーん（突然何？脈絡ないし）」

旦那様は花畑の真ん中に座り込んでボクを膝に乗せる。ボクは膝の上で丸くなる。

「ヴェルフォール家は、代々王家とエルシオンを守る役目を担っているんだ。だから、そのどちらかに危機が迫るようなら、身を呈してでも守らなきゃならない」

「…うなー（…何それ、フラグ?）」

「心配しなくても、オレはネロより先に死んだりはしないよ」

旦那様はそう言ってボクを優しく撫でる。

…まあ、猫の寿命は精々20年くらいだ。人の三分の一、四分の一

程度しか生きられない。旦那様の種族がどれくらいの寿命を持つのかは知らないが、きつと、人間と同じか、それよりもずっと長く生きるのだろう。ボクの寿命が猫であっても、人であっても、きつと、僕よりも長く生きるのだ。…何らかの突発的な理由で死んだりしない限り。

「なおん（心配は、してないけど）」

でも、何だかんだいって、微妙にずれてはいるけど、可愛がってくれる旦那様には、死んでほしくないな。

屋敷が何だか慌ただしいような雰囲気を持っている。…否、実際慌ただしい訳ではないのだけど、何と言うか…ピリピリしてる？
ボクは、できる限り、歩きまわらず、日当たりのいい場所で昼寝して過ごす。歩きまわっても、その部屋と旦那様の部屋くらい。
屋敷中の、何だか緊張している様な、そんな雰囲気が、居心地が悪

かった。

「おや、お嬢様。こんな所にいらしたのですか」

「なーん（何？ボクに何か用？）」

張り付けた様な笑みを浮かべているバトラーに、ボクは首を傾げる。一つは、バトラーの、ボクを探していた様な発言に。もう一つは、その表情に。バトラーは表情を取りつくる様な事をしないというわけではないが、わかりやすく作り笑顔を浮かべるタイプではない。

「旦那様が、出かける前にお嬢様の顔が見たいと駄々をこねるものですから」

いつもの事じゃん。

「なおー（何処か遠くにでも行くの？）」

「…数日は、戻ってこられないかもしれません」

「なーん（じゃあ、ちゃんと戻ってらっしゃいって言わないとかもね）」

「お嬢様がいつてらっしゃいを仰れば、旦那様は予定を半分以下で終わらせる勢いで頑張るでしょうね」

なにそれこわい。

「ネロー、ちょっとした間だけど、オレの事忘れてたりすんなよー？絶対ちゃんと帰ってくるからな！」

「なーん（ウザい）」

旦那様はボクをぎゅーっと抱きしめて頬をすりつける。何を危惧しているのだろうか。…まあ、確かにボクは記憶力が悪いけど、忘れたいはしない…はず。うん、忘れないよ、多分。期間にもよるだろうけど。

「アンゲル共なんて、ぎったんぎったんの、ばっきばっきで、ぐっちゃぐつちゃにしてさっさと帰ってくるからな！」

「なー（なにそれこわい）」

ていうか、旦那様一体何処に何しに行くの。アンゲルって何。…まあ、ボクには関係のない事だろうけど…。

旦那様の熱烈なお別れのあいさつ…っていうかもう寧ろ儀式か何か？を終えて、若干名残惜しそうにしながらも出かけて行った旦那様を見送ると、ボクはまた一人になる。

旦那様は、何故か、銀色の綺麗な鎧を身にまとっていた。

『“アンゲル”と一戦交えるのかしらね』

そう考えるのが一番自然なんだろうね。…発言的にも、見た目的にも。

アンゲルが何なのか、旦那様は何故それと戦うのか、気にならない

訳じゃない。でも、気にしたって、意味はない。考えたって、わかるものじゃない。

だって、ボクはそもそも、旦那様が”何”なのかも知らないから。よく考えると、名前すらも、よくわからないのだ。…ええと、確か、フアニーはルードお兄様、って言ってた、ような、気がする…けど。

『可愛がってくれている相手なのにな』

だって、会話は通じないし、自己紹介された事もないもの。知らなくたって仕方ないでしょ。

『知ろうとも、しなかったじゃない』

否定はしない。だって、旦那様の名前を知らなくても、”何”なのかを知らなくても、不自由はなかったのだ。旦那様が何であっても、何をする人でも、どんな立場である人でも…関係は、無かったのだ。そして、それは今も変わらない…はずだ。

『でも、気にはなるのよね』

今更の事だけど。…帰ってきたら、ちゃんと聞いてみようか。

…否でも、話通じないもんなあ…。バトラーは若干話に通じてる感があるけど。どのぐらい伝わっているのかはよくわからないけど。

『早く帰って来るといいわね』

…うん、そうだね。若干ウザいけど、でも…嫌いじゃあ、ないもの。

旦那様がいないと、屋敷は静かになる。

…いや、別に旦那様がいるとうるさいってわけではないのだが、何と言つか…活気がない、とでも言えばいいのかな。一人いないだけでこんなにも雰囲気が変わるといのはちょっとすごいと素直に思う。

『寂しいの？』

寂しい？そんな事はない。だって、ボク一人きりってわけじゃない。バトラーは屋敷に残っているし、使用人の人も旦那様についていたのは、殆ど騎士の様な形をした人ばかりだ。まあ、ほぼよく知らない人なんだが。だから、別にさびしい、なんて事はない。

『可愛がってくれてる人が留守にしても、寂しくないの？』

よくわからない。だって、感情ってよくわからないもの。でも、多分、寂しいとは思っていないと思うよ、今の所。

旦那様が出かけて一時間も経ってないと思うし。ボク、其処まで旦那様大好きってわけでもないし。

『そう。じゃあ、もし大好きだったら寂しくなるのかしら』

…そう、なのかな。人を大好きになった事なんてないから、わからないよ。

『本当に？』

ボクを疑うの？何故？君は知ってるでしょう？ボクは、人を好きになつた事なんてないよ。だって、人がボクを嫌うから、好きになりようがないんだ。ボクを嫌いな人なんて好きになるわけがない。そんな人が好きになれるほど広い心をボクは持つていない。ううん。オレには心なんてない。もうとつくになくした。だって、必要ないから。オレには心なんて有っても苦しいだけだから。だからなくした。いらないからなくした。いらないものを持つていたって仕方がないから、だからなくした。壊れたものはいらないからなくした。だから、オレは心がないし、人を好きにもならない。

『あら、でも、彼らがあなただを可愛がつてくれているのはわかるでしょう？』

うん。旦那様も、バトラーも、皆ボクに優しくしてくれる。可愛がつてくれる。

『だったら、可愛がつてくれる人を、あなただを好いてくれる人を、好きになつたりしないの？』

…わからない。だって、好きがつて気持ちかわからないから。わからないから、ボクがあの人達を好きなのかもわからないよ。わからないんだ。だって、知らないもの。好きだなんて、わからないんだ。わからないから、わからないよ。

わからない。

わからない。

わからない。

わからない。

わからない。

『…でも、きつと、あなただも彼らが好きなのよ』

そう、かな。…君が言うなら、きっと、そうなんだろうね。きっと、ボクは彼らを好きになれているんだろっね。きっと、そう。そうだと、いいな。だって、人を好きになるのは、素敵な事であるらしいから。

『そうね』

そうだったら、よかったな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1544r/>

猫になる

2011年11月13日19時02分発行